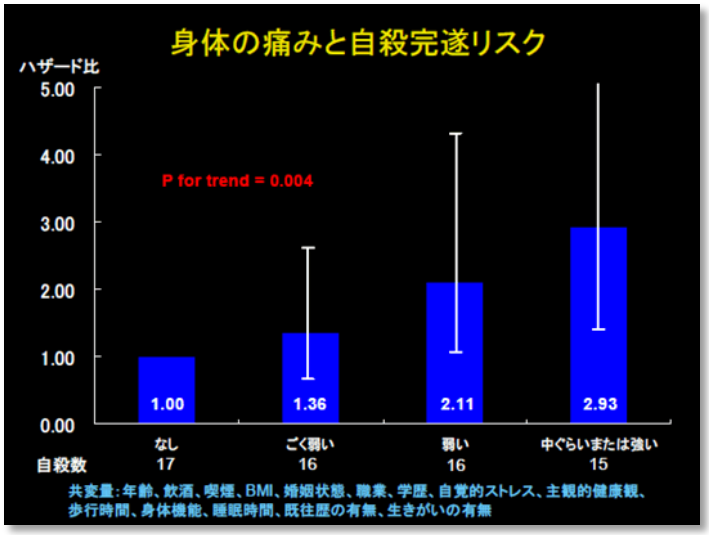
痛みと自殺リスクとの関連について：大崎国保コホート研究

Pain and Risk of Completed Suicide in Japanese Men: A Population-Based Cohort Study in Japan (Ohsaki Cohort Study)
2008 年　Journal of Pain and Symptom Management 発表

身体の痛みがひどいほど自殺リスクが高まる

身体の痛みは、多くの方々が苦しまれている症状です。有効な痛みの治療があるにもかかわらず、痛みの治療が十分に行われていないことによる健康への影響については、よく理解されていません。これまでの研究では、痛みのある患者では自殺念慮／企図リスクが上昇していることが報告されています。しかし、自殺完遂リスクとの関連や、痛みの程度と自殺リスクとの関連を検討した研究はほとんどありませんでした。そこで、大崎コホート研究における男性のデータから、身体の痛みの程度によって参加者を４つのグループに分け、自殺死亡のリスクを比較しました。
多変量解析の結果、身体の痛みが「ない」と答えた方に比べ、身体の痛みが「中ぐらい」または「強い」と答えた方では自殺リスクが 2.93 倍高くなりました。さらに、身体の痛みが「弱い」と答えた方でも自殺リスクが 2.11 倍と高いリスクが示されました。また、身体の痛みが強くなるにつれ、自殺のリスクが直線的に高くなりました。



研究データについて

ベースライン調査：1994 年 10 月から 12 月までに、宮城県の大崎保健所が管轄する 14 市町（当時）に居住する、40-79 歳の国民健康保険の加入者約 5 万 5000 人を対象に、生活習慣に関する自己記入式アンケートを配布し、5 万 2029 人から有効回答を得ました。回答率は 95％でした。生活習慣に関する調査内容は、病気の既往歴と家族歴、体型などに関することなどの健康状態、運動習慣、喫煙、飲酒、食事などの生活習慣、教育歴などの社会的な状況から構成されています。
追跡調査：ベースライン調査に答えて頂いた方のうち、追跡開始以前に国民健康保険から脱退した方 774 人を対象から除外しました。今回の研究に関連する質問への回答に不備のあった方、女性を対象から除外した 2 万 6481 人を対象としました。ベースライン調査時から 2001 年 12 月 31 日までの 7 年間の追跡調査で、64 人の自殺による死亡が確認されました。

身体の痛みについて

アンケート調査では、「過去 4 週間に、身体の痛みはどの程度ありましたか」という質問に、「まったく痛くなかった」「ごく弱い痛みは感じた」「弱い痛みを感じた」「中ぐらいの強さの痛みを感じた」「強い痛みを感じた」の５つから回答を選んで頂きました。身体の痛み以外に自殺リスクに関わる可能性のある他の条件については、その影響をできるだけ取り除きました。具体的には、年齢のほか、職業、最終学歴、配偶者の有無、喫煙、飲酒、Body Mass Index、自覚的ストレス、主観的健康観、歩行時間、身体機能、睡眠時間、既往歴の有無、生きがいの有無について、グループ間に偏りがないように統計学的な処理を行いました。

研究の特徴と限界について

これまでの大規模前向きコホート研究で、身体の痛みと自殺完遂リスクの関連を検討した報告はありませんでしたが、本研究では、日本人の一般地域住民を対象として、身体の痛みと自殺完遂リスクとの強い正の直線的な関連が示されました。本研究の限界としては、(1) 精神疾患に関する情報が不足していること、(2) 身体の痛みの評価は、ベースライン時の 1 回のみの評価に限られるため、その後の変化は考慮していないこと、(3) 40 歳から 79 歳の男性を対象にしているため、本研究の結果は、若年者や女性には適応できない可能性があること、が挙げられます。